

日本語による 1000 字レジュメ
『トラシュブロスからレウキッペへの手紙』に見る感覚論
飯野和夫

cahier, no.21 (日本フランス語フランス文学会、2018 年 3 月発行) 所収
「2017 年度秋季大会ワークショップの記録」のための原稿 (飯野執筆分) の公開

* * *

この文章は、日本フランス語フランス文学会 2017 年度秋季大会
〔2017 年 10 月 28 日(土)、29 日(日)、名古屋大学〕において行われた、
次のワークショップでの飯野のフランス語による発表の日本語要旨です。

ワークショップ7 10月29日(日)
哲学的地下文書研究、成果と今後の展望
——アルティガス＝ムナン氏とともに考える——
コーディネイター： 寺田元一
パネリスト： アルティガス＝ムナン 三井吉俊 飯野和夫

* * *

フランス 18 世紀の地下文書の研究をさまざまな観点から進めていく一つの試みとして、
感覚論哲学との関係から文書群を眺めてみたい。

18 世紀フランスでは、ジョン・ロックの『人間知性論』(1690) の影響下に、多くの思想家が感覚論的立場を取るようになった。18 世紀初頭には、デュボス Du Bos, デュマルセ Du Marsais, モーベック Maubec ら、18 世紀中葉に至ると、ラメトリ La Mettrie, ヴォルテール Voltaire, ダランベール D'Alembert, デイドゥロ Diderot らである。ただし、これらの論者たちは感覚論哲学を自ら体系的に展開することはなかった。

一方、地下文書においても、多くの文書で感覚論的立場が表明される。理神論的文書では、『宗教の検討』、『物質的靈魂』、『靈魂の本性に関する哲学者たちの見解』、『哲学者』といった文書群であり、無神論的・唯物論的文書では、『生死一如』、『ジョルダノ・ブルーノ復活』、『世界形成論』といった文書群である。

しかし、以上の感覚論的立場を表明する地下文書でも、感覚論の体系的な展開はほとんど認められない。そうした中で、理神論的文書の一つであり、1720 年代にフレレ Fréret によって執筆されたと想定される『トラシュブロスからレウキッペへの手紙 *Lettre de Thrasibule à Leucippe*』は、感覚論を、量的に多くはないが、一番まとまった形で展開している。

それによると、観念は生得的ではなく、「生まれた時に私たちに具わっているのは、(…) 他の諸存在から受け取る印象を感受し、それと認める素質」(『啓蒙の地下文書 I』、法政大学出版局、2008 年、p.186) である。また、外界のものの印象は、常に何らかの快不快の感情を伴い、私たちの心には、「快樂を好み、苦痛を嫌う」法が刻み込まれている (p.215)。

一方、「この法は私たちの保全に適当な（・・・）行動に快樂を結びつけ、それに反する行動に苦痛を結びつけ」ている (ibid.)。よって、私たちは「自然な本能」として自己の保全に向かう。認識論としては、「私たちは、事物についての個別的な観念を獲得し、次いで、さまざまな知覚を比較することによって、これらの対象に関する一般的、普遍的観念を形づくる」(p.186)。「最大の快を与えるものを選択するために、現前の対象のみならず、記憶の中にあるものとも、同時に比較する能力」が理性と呼ばれるものである (p.188)。

とはいえ、著者は感覚論の細部の展開には立ち入らず、独創的な主張が認められるわけでもない。ロック思想を発展させる本格的な感覚論哲学の登場は、1746年のコンディヤックの『人間知識起源論』の刊行を待たねばならないのである。

なお、ワークショップでのフランス語による報告の原稿は次の URL で公開している。

<https://inokazuo.files.wordpress.com/2017/11/workshop-iino.pdf>

<参考文献>

地下文書

『啓蒙の地下文書 I』法政大学出版局、2008

『トラシュブロスからレウキッペへの手紙』 *Lettre de Thrasybule à Leucippe* (石川光一訳)

『生死一如』 *Parité de la vie et de la mort* (寺田元一訳)

『物質的靈魂』 *L'Âme matérielle* (野沢協訳)

『宗教の検討』 *Examen de la religion* (逸見龍生訳)

『啓蒙の地下文書 II』法政大学出版局、2011

『世界形成論』 *Dissertation sur la formation du monde* (飯野和夫訳)

『新しき思想の自由』 *Nouvelles de libertés penser* (寺田元一訳)

『靈魂の本性に関する哲学者たちの見解』 *Sentimens des Philosophes sur la nature de l'âme*,

『哲学者』 *Le Philosophe*, 『靈魂の実在と神の実在の考察』 *Réflexions sur l'existence de l'âme et sur l'existence de Dieu*

研究

Jørn Schøsler, *John Locke et les philosophes français : la critique des idées innées en France au dix-huitième siècle*, Voltaire Foundation, 1997.

Jørn Schøsler, « L'Éssai sur l'entendement de Locke et la lutte philosophique en France au XVIIIe siècle : l'histoire des traductions, des éditions et de la diffusion journalistique (1688-1742) », *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, 2001 : 04.

Jørn Schøsler, « Locke, penseur subversif dans les manuscrits clandestins », *La Lettre Clandestine*, no.15, 2007, p.17-44.

John W. Yolton, *Locke and French materialism*, Clarendon Press, 1991.

赤木昭三『フランス近代の反宗教思想』岩波書店、1993.

沢崎壮宏「有機組織体という機械——ラ・メトリにおける偶然」、『フランス哲学・思想研究』第21号所収、日仏哲学会、2016年9月